

# 音声、意味、そして精神の壁

## 詩とことば

\* 2月

阿部 公彦

あの文芸評論家が亡くなったのは一九八三年。新聞に大きく記事が出ると、高校の国語の先生が「君たちには難解だろうな。読めるもんなら読んでみるよ」と挑むように言ったのを覚えている。

小林秀雄はそれくらい存在感のある人だった。それにしても「難解」ということは、当時、何と甘美に響いたことか。手に取った文章はたしかに難しかったが、ランポー、ヴェルレエヌ、マラルメといった名前がちりばめられ、遠いものへの憧れと畏怖とをかきたてた。

あれから三〇年。今や「わかりやすさ」全盛で、詩とすると外国物はおろか日本語作品でも二の足を踏む、という時代だ。そんな中で「渡辺守章訳『マラルメ詩集』(岩波文庫)。難解中の難解で知られる詩人が、なるほど単純明快とはいかないが、舌に乗せると少しづつ溶けるような日本語になっていく。むろん音の壁はある。何しろ「ラジュエトリオンフ エジュ

を読みほどもく」、富岡悦子「パウル・ツェランと石原吉郎」(共にみすず書房)はこの二十世紀を代表する詩人を、まるで潜行するようにして読む。ナチスの迫害を受け、ことばの無力に直面した過去を持つ独逸ユダヤ人のツェランは、詩を瓶詰めの手紙に喩えた。ことばが到達するのか、しないのか。そんな境地を静かに、厳かに語る詩群の迫力に打たれる。

ランタン…」が「蒼穹は勝ち誇り、聞こえてくるのは…」だ。似てはいない。でも、何か通じる。断絶を前にしたこんな苦心の変換には、まさに人間文化の本質がある、とも思う。

対照的に『時間は水銀のごとく地に落ちる』(池上貞子訳、思潮社)の台湾詩人・夏宇。「あれ?」と思わせる着想で、イメージもひよいと飛ぶ。そのついていけない心地がかえって気持ちいい。易しくはないが、不思議と「壁」がない。一九五六年生。軽快さに、時代を感じた。(東大准教授)

旺盛に文学や社会について語る高銀さん



韓国を代表する詩人の高銀さんが来日し、東京都内で7日講演した。

## への憧れ

人間の「暗の部分」を示すという考えを説明した。それに対し、「人間の尊厳や人権といった概念は極めて最近出てきた」として、「『人民』や『市民』といった言葉は『国民』という言葉に比べて虚弱な名前だ」と厳しい認識を明かした。

そのうえで、「全ての可能性は、不可能性の中で種がまかれる」。「東アジア共同体」の実現やその先にある「世界

か。書いたと

り覚えてい

10年以上前

芝助さんの

ついでに、

物語だと思っ

たんです。

べるこわも

連載のとき

たんです。

たんです。

たんです。

たんです。

たんです。

聴き逃したら損しちゃう!? 今週は 文化放送 スペシャルウィーク!!

# 絶対オススメ番組セレクション

# 最新作 樹